**説教20231015フィリピ3：12-21マタイ21：33-46「我らの本国は天にあり」**

**今日のマタイ福音書でイエス様は、悪人たちに支配されたぶどう園の喩えを語られています。ぶどう園とは、聖書において、神の民たちの国イスラエルを示していますが、今、この地上のイスラエル国は戦争の中にあります。果たして、この地上において、主イエスの平和は実現するのでしょうか。そのことについてイエス様は次の様に語っておられます。**

**「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と。つまり、二人または三人が主イエスの名によって集まるところには、まさに神の国が実現しているのです。**

**今日のマタイ福音書の聖書箇所で語られるぶどう園は、悪がはびこる、決して行きたくないような有様ですが、この様な有様のぶどう園は、実際によくあったそうです。そこでは労働者たちが、主人の勢力を徐々に排除して、最後にはそのぶどう園を我がものにする、という訳ですが、こんなことは、つまるところ所有権争いである今日の資本主義社会でも当たり前にみられる有様だと思います。**

**この悪いぶどう園に対して、聖書ではよいぶどう園についても語られています。それはイエス様ご自身がぶどうの木であると語られる有名な箇所です。ヨハネによる福音書15章 1節以下、新約聖書198ページになります。**

**「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。**

**わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。**

**わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。**

**わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。**

**さてあなたは、ここに記されているよいぶどう園と、先ほどの悪いぶどう園との、どちらで暮らしたいでしょうか。この問いかけに対し、私は悪いぶどう園で暮らしたいです、と言われる方はそうはおられないことでしょう。そんな殺人が横行して、所有権争いばかりしているぶどう園に居て、心安らいで幸せでありえましょうかという訳です。でも、私たち人間は、目に見えるこの地上のぶどう園を一つの例外もなく、全て悪いぶどう園へと悪化させているような時代に今生きています。**

**私たちは今、自ら望まない方向へと、流されていっています。私たちは、今こそ、人間の力をはるかに超えた主イエスに、憐れみを乞い求めて祈る時にあります。**

**今日のマタイ福音書の箇所を見て参りましょう。**

**マタイ福音書 21章 33節**

**「もう一つのたとえを聞きなさい。ある家の主人がぶどう園を作り、垣を巡らし、その中に搾り場を掘り、見張りのやぐらを立て、これを農夫たちに貸して旅に出た。」**

**ここである家の主人とは、父なる神のことを喩えていますが、父なる神は、農夫である私たち人間にこの農園の維持管理の一切を任せて旅に出られたのでした。そして旅に出られるに際し、父なる神は、農夫たちの為に、外敵を防ぐための垣を巡らし見張りのやぐらを立て、そして農夫たちが喜び歌いながらぶどうを絞ることが出来るようにと（イザヤ16：10）、搾り場を整えて下さいました。この様に農夫たちを愛して、農園に万全の体制を整えてから旅に出た父なる神でしたが、農夫たちはその愛に応えることがありませんでした。**

**或いは、農夫たちのもとを父なる神が旅立つ時、農夫たちと父とは抱き合って、その愛を確認できたかもしれません。しかし、農夫たちが父なる神を愛する愛は、長く続くことがなかったのでした。**

**私たち人間が、父なる神を愛せなくなっていくさまは、この搾り場での労働を黙想すればわかってきます。**

**搾り場と言うのは聖書の中で大切な言葉の一つです。皆さん、ゲッセマネという場所を御存じかと思いますが、イエス様が十字架に付けられる前に、血の汗を滴らせて祈られた場所である、ゲッセマネの意味は、油搾りの場所と言う意味であります。**

**さて、ぶどうを絞るという仕事は、大変繊細で、気を使い、研究を必要とする仕事の様です。この仕事はぶどう酒をつくるための最初の行程ですが、毎回同じように行えば良いというわけでなく、生産者たちは状況によって様々な判断をしなくてはなりません。**

**たとえば、ブドウの品種によって、プレスの強弱を最適に調整し、そして、ぶどうの成熟度合いによって、アルコール発酵の進展をも調整しなければなりません。更に、どのような味のワインを目指すかによってもプレスの仕方は変わります。例えば、エレガントで雑味のないスタイルのワインを目指すのであれば、短時間・高圧力のプレスは避けないといけません。**

**以上は、或るワインメーカーのホームページからの引用でしたが、この様に、ずっと気を使って、よい味のぶどう酒をつくろうとする搾り場の仕事にまじめに従事し続けるならば、決して、その人のうちに悪い心が芽生えることはないのではないでしょうか。そして、そのまじめで一生懸命な人のうちには、主人に喜んでもらえるぶどう酒をつくりたい、皆さんに喜んでもらえるぶどう酒が造りたいという、愛の心がいや増していく事でしょう。又、そのような愛の心からなされる仕事と言うのは、本来楽しいことであるということも聖書には記されています。イザヤ書16（：10）章に次のような主の言葉が記されています。**

**わたしは果樹園から喜びも楽しみも奪う。ぶどう園で喜びの叫びをあげる者も／酒ぶねでぶどうを踏む者もいなくなり／わたしは喜びの声を終わらせる。**

**この様にぶどうの搾り場と言うのは、本来、喜びの叫びに満ち、楽しみに満ちたものとして、父なる神から与えられた仕事場だったのです。**

**ところが、その喜びの声と楽しみに満ちていた搾り場の労働は、奪われていきました。そしてそのぶどう園では、殺人と言う罪がはびこっていきました。では、このぶどう園でも初めは満ちあふれていた、喜びの声と楽しみは、何時の時点で失われたのでしょうか。**

**その喜びと楽しみが失われていくのは、ちょっとした些細な出来事がキッカケになったのかも知れません。ちょっと想像力をたくましくして語るなら、ある日、一人の農夫が、搾り場での労働から抜け出して、こっそりとぶどう酒に酔いしれているのが見つかって、周りに波紋が広がり、嫉妬心や憎しみの心がみんなに増長していった、と言ったような成り行きが想像できます。**

**この様に私たち人間の心は移ろいやすいので、いとも簡単に、嫉妬心や憎しみと言う罪の方向へと向かってしまうことでしょう。そしてそんなちょっとした些細な出来事によって、知らない間に、罪の方向へと方向転換してしまう、私たち人間ですから、先週申し上げました、日々の、悔い改めということが必要になって来るのです。私たちは日々悔い改めて、主イエスのほうへと向き直らなければなりません。**

**さて、このぶどう園では、小さな罪が段々と大きく積み重なって、遂には、主人の息子までも殺してしまうという大きな罪に至る有様が記されています。私たちはこのぶどう園での成り行きをよく黙想するうちに、戦慄を覚えることでしょう。初めは愛し合っていた父と農夫たちが、次第に離れて行って、農夫たちは罪を重ねるようになり、そして悪い農園をつくってしまいました。そして、皮肉なことに、その悪い農園を維持するために、見張りやぐらから、入ってくる人々を監視し、遂に入って来た息子を殺してしまったのでした。**

**この息子は父なる神の一人子イエス様のことをたとえています。**

**イエスさまはゲッセマネで次の様に祈られました。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」わたしの願いどおりではなく、御心のままに。というのは、私の願いではなくて、父よ、あなたの願いが実現しますように。という意味であります。**

**主人である父なる神の願いは、このぶどう園に愛が取り戻される事でした。喜びの声と楽しみに満ちた搾り場の労働が取り戻されることでした。ですから、子であるイエス様は、この父の願いが実現されるために、自分の思いではなく、父の御心のほうに従順に従って、十字架に付いて殺されたのでした。そしてその十字架で流された主イエスの血潮によって、このぶどう園は、本来の喜びが満ちたぶどう園へとよみがえることが出来たのです。**

**イエスさまがこの地上に来て下さって、すっぱくて味気ないぶどう酒をつくり続けていた私たち人間の為に、血潮を流して死んでくださって、それからよみがえって、今、私たちとつながっていて下さる、という出来事がなければ、私たちは、悪いぶどう園の中にあって、訳も分からないままに憎しみあい殺し合いをしてしまう人間のままでありました。しかし、今やイエス様は、信じる者たちのすぐそばにいて、絶えず祝福し守っていて下さます。そこにまことの良いぶどう園が既に形作られています。**

**しかし、同時に私たち人間は、未だ、完全に、本国である天の国に迎え入れられた訳ではありませんので、いつも、昔いた悪いぶどう園の面影に誘惑されるのです。あの信仰深いパウロでさへ次の様に語っています。**

**フィリピの信徒への手紙3章 13節から**

**兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。**

**この様に、パウロは未だ、完全に、自分がイエス様に捕えられ、イエス様のものとなっていないことを告白しています。つまり、パウロ自身も、時に、昔のことに誘惑され、前を向けなかったことがあるということでしょう。あのパウロでさへ完全ではなかったのだから、なおさら私たちは、ということはかえって私たちの慰めにも励ましにもなることでしょう。**

**そして天地にあって、ただ一人完全な方は、主イエス・キリストであります。私たちは、今日も明日もイエス様のほうに向き直って、イエス様によって全ての仕事や出来事を喜びと楽しみで満たしていただき、遂には、わたしたちのこの朽ちる体を、キリストの栄光ある体と同じ形に変えてくださるよう祈り求めて、日々を送って参りたいと願います。**

**父なる神よ**

**あなたは、豊かで喜びに満ちたぶどう園を、この地上において、私たち人間の為に計画して下さいました。その大いなる恵みに感謝し、あなたに賛美を捧げます。**

**しかし、私たちの小さな罪の積み重ねにより、今や、この地上のぶどう園の姿は、荒れ果てています。どうか、ぶどう園にあって、私たちが、御子キリストのものであり、キリストの木につながる一つ一つの体の枝であることを、益々自覚し、あなたの恵みとまことを日々受け取って歩む者たちとならしめてください。我らの本国である天の国に至るまでその歩みを守り祝して下さいますように。**

**ぶどうの搾り場にあって、私たちの為に、絞られ、救いの血汐を流して下さったキリストに倣い、私たちも搾り場にあって絞られ、罪ある体が打ち砕かれて、遂に朽ちない栄光ある体を完成させて下さい。**

**今、この地上で、憎しみによって多くの人々の血が流されています。どうか私たちを憎しみから解放してください。あなたから与えられる日々の小さな恵みを見逃すことなく、確実に受け取り、恵みで満たされる生涯を、送らせて下さい。**